Major Histocompatibility Complex　2023; 30 (1): 30-31

笹月健彦先生を偲んで

長崎大学名誉教授
平山　謙二

私が先生と初めてお会いしたのは，1977 年東京医科歯科大学の医学部 3 年の人類遺伝学の講義の時ではなかったかと思います。難治疾患研究所にアメリカ帰りの新進気鋭の先生がいらっしゃるとの情報が学生の間でひろがり，どんなことを話される先生なのかという漠然とした興味から，講義に参加したのを覚えています。どうしてだか覚えてないのですが, カセットテープレコーダーを持参して何のご専門かもわからない先生の講義を録音させてもらいました。そのテープはもう手元にありませんが，講義は多分免疫応答制御に関するお話だったと思います。最初にいろいろ基本的な知識について学生に質問されてましたが，ほとんど全滅だったのを覚えています。「イディオタイプについて説明してください。」「・・・」という感じで，全く理解不能でした。しかし，帰宅後テープを再生し時々繰り返したりして聞いてみると，壮大な免疫の物語を非常に丁寧に話されている雰囲気をやっと理解することができました。思えばあの時にその後の私のライフワークとなる免疫応答の遺伝子支配というテーマがすでに示されていたのかもしれません。

その後，Mixed Lymphocyte Culture や血清による HLA タイピングなどの学生実習で笹月ラボを見学したり，学生の有志 5-6 名で先生ご推薦の著名な免疫学者の論文抄読会を週一で土曜日に開いていただいたりして，免疫学がいかに面白い分野であるかについて in printing してもらいました。先生は研究者としてはもちろん，教育者としても一流の方であったと思います。

その当時の笹月ラボは, 創設期ということで, 千葉大の多田研からの助っ人である河野先生や岩本先生が実験室を支え，その下に九大から兼岡先生，宇野先生，西村先生，菊池先生，五島先生，原田先生，松下先生，杉尾先生，安波先生が周りを固め，そこに大学院生として，太田先生，武藤先生，曽根先生，塚本先生が所属し，医科歯科大の卒業生も，平山から始まり，鬼沢，高橋，藤沢が加わり，さらに臨床から研究協力員として，たくさんの先生が各種疾患と HLA の関連について研究されていました。この間 1978-1988 に, Nature4 報 , J.Exp.Med2 報 , NEJM2 報 , PNAS1 報 , J.Immunol5 報が出ており，Imm.Rev でも 2 回ほど取り上げられています。もちろん，これらの業績の中心には，疾患抵抗性の遺伝子支配という大テーマがあったわけですが，このテーマを分子生物学，免疫学の最新の技術と知識で解き明かしていこうという笹月先生の強い意志がラボの中に浸透していて，若々しく活気あふれる雰囲気だったと思います。忘年会や新年会などの時は，特に盛り上がり，可能な人はパートナーを同伴して歌や踊りに興じたのを覚えています。そういうときの先生の口癖はいつも「世界に冠たる仕事をしよう」で，それさえ心がければ，すべてが許される（違法でなければ）という，これまた「刷り込み」を受けたわけです。

先生の学術的な交流範囲はやはり世界的で，留学先のスタンフォード大学免疫学の同僚の先生方を中心に拡がっていて，アメリカはもちろん，英国やドイツなどの著名な研究者との親密な情報交換が行われていました。海外の学会やシンポジウムに頻繁に招待を受けておられ，先生の留守中のんびりとしていたのも思い出されます。1983 年京都で国際免疫学会が開かれ，先生のお師匠の山村雄一先生が大会長を務められましたが，いろいろなシンポジウムや研究集会，懇親会などにも教室員を学生に至るまで参加させていただき，普段論文などでしか見たことがない先生方に自分のデータを紹介させてもらったり，コメントをもらったりすることができたのは，その時は大変でしたが，極めて教育的なご配慮だったと思います。

その後，先生は九州大学に移動され，私自身は毎年の免疫学会や組織適合性学会，人類遺伝学会などでお目にかかって少し近況をご報告するようなお付き合いを続けさせていただきました。もちろん，何かにつけて，温かい励ましの言葉をかけていただいたり，ご無体な頼みごとを電話でしていただいたり（一回だけです）と師弟のお付き合いを大変有り難く思っておりました。長崎のお土産のカステラをお持ちすると, これはミルクと一緒にいただくのがおいしいんだと,

喜んでいただいたのを覚えています。

2003 年 9 月 7th Asia-Oceania Histocompatibility Workshop(AOH) 軽井沢にて
Prof Preeyachit, her staff, 笹月先生，平山，猪子大会長

先生が突然 2001 年九大を出られて，国立国際医療研究センター（NCGM）研究所長となられたときはびっくりしました。その後，2004 年から 4 年間センターの総長としてナショナルセンターのトップという大任を果たされたのですが，なんとここでまた先生と近しくお仕事させてもらうことになったのは本当に幸せなことでした。ちょうどそのころ長崎大学はアジア拠点を支えるプロジェクトとしてベトナムのハノイの衛生疫学研究所およびバクマイ病院を中心とした「文科省の新興感染症海外研究拠点ネットワーク J-GRID」を NCGM と共同で申請することになったのです。長崎は長い間ベトナムとの 2 国間共同研究を継続しており，特に日本脳炎やデング熱などの感染症研究では存在感を示していたわけですが，NCGM も医療協力局を中心にバクマイ病院などで AIDS，呼吸器感染症，結核などの臨床研究を推進し世界に冠たるグループを形成していました。このプロジェクトは無事に採択され最初 5 年期限だったのですが，先生のご尽力もあり，現在まで続く長期プロジェクトとなり，NCGM との協力体制もますます強力なものに発展しています。

これまで私は不詳の弟子としてご迷惑とご心配ばかりおかけしてまいりました。先生の遺伝子は残念ながら受け継いでおりませんが，ミーム（meme）は多少なりとも受け継がせてもらったように思います。ご家族を慈しみながらいつも真摯に学問に向き合って来られた先生の高貴な魂を見習い，命尽きる寸前まで懸命に学問を続けて参りたいと思っております。あちらでも休むことなく，我々を見守ってください。合掌。